

## 言語聴覚士による失語症のある人への社会参加支援の効果

### —失語症のある人への質的研究を通して—

社会医療法人敬和会 大分リハビリテーション病院 氏名 佐藤 俊彦 (9572)

隅田 好美 (大阪府立大学・4481)

キーワード：社会リハビリテーション 生活状況 心理状況

#### 1. 研究目的

失語症のある人（以下「失語症者」）は社会参加を希望しているが、コミュニケーションの困難さが妨げとなっており（特定非営利法人全国失語症友の会連合会 2013）、社会参加支援が必要である（藤田 2015：204-205 他）。

本研究では社会参加と関係の深い（奥野 2007：111-112）社会リハビリテーションの概念を中心に言語聴覚士による失語症者への社会参加支援の効果を壮年期失語症者への質的研究を通して明らかにする。

#### 2. 研究の視点および方法

言語聴覚士による失語症者への社会参加支援の効果を、学童期に脳出血初発した壮年期失語症者 A（40 歳代前半）への質的研究を通して、社会リハビリテーションの概念を用いながら生活状況の変化と心理状況の変化の視点から明らかにする。

方法は、質的研究を用いた。聞き取り調査は、1対1での半構造化面接によるインタビューを行なった。聞き取り調査後、研究対象者の同意を得て録音した内容をもとに逐語録を作成し、聞き取り調査で得られたデータと参与観察で得られたデータを分析した。

#### 3. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、大分大学大学院社会福祉研究科倫理委員会と社会医療法人敬和会倫理審査委員会の承認を得た。（大分大学大学院社会福祉研究科倫理委員会 承認番号 H30-2、社会医療法人敬和会倫理審査委員会 承認番号 A0019）。A に対して、それぞれ口頭と文章にて研究の趣旨と倫理的配慮を説明し同意を得た。

#### 4. 研究結果

壮年期失語症者 A と初回面談から、学童期の脳出血をきっかけに家族との関係の中で「してもらおうこと」が当たり前になっており、違和感を感じていなかった。また普段の生活においても家族の送迎での外出や固定化された人間関係、趣味活動を含めて母親を中心とした家族に与えられた環境の範囲内で生活していると評価した。

その現状に対し、A の自己の意見を伝えようとする積極性や温和な性格、社交性、社会的行動に問題のない点に着目し、加えて両親の年齢から今後、家族といえども依存しすぎず A 自身が家族から自立した生活を必要となるのではないかと考え、A の今後の人生における自立した生活に向けた社会参加支援を立案した。

A の社会参加支援の目標を「自己選択、自己決定のもとを主体的な生活をおくる」と設

定し、具体的な支援として、失語症状全般の回復へのアプローチ、他者交流の場の設定、インターネットの利用、バスの利用、調理、ボランティアへの参加を行なった。

社会参加支援の結果、家族に依存傾向だった生活から趣味を中心に活動範囲が拡大した。A自身で行きたい場所を決め、A自身では困難なことは母親に必要な支援を依頼するなど自己選択と自己決定のもと主体的に行動することが可能となった。

Aの心理的状況の変化としてAは自身の生活状況の変化を『レベルアップした』『すごいと思った』と語るとともに、現在の生活を『いいのかなあってこれでよかったのやろうかなあと思う』と語った。

## 5. 考察

社会リハビリテーションの定義は、「障害のある人が自分のニーズを満たし、社会参加する権利を行使する力である社会生活力を高めるプロセス」(国際社会リハビリテーション社会委員会 1986)とされ、社会生活力は、積極的に社会参加していく力でありそれを身につけることはQOLの向上につながる(奥野 2007: 111, 113)。

今回、失語症者への社会リハビリテーションの視点からの社会参加支援による、言語機能訓練、生活領域の活動の支援、ボランティアへのひとりでの参加、他の利用者との交流を通し、Aの生活状況は、A自身が自信を持ち、自己選択、自己決定のもと社会参加することで、家族に依存傾向にあった生活からA自身の主体的な生活に変容した。

Aの心理状況について、社会参加支援を通してAは日々の生活の満足感を得ながらも、更なる人生の充実を望む結果となった。これは社会参加支援により、会話レベルでの満足感から、ボランティアを通じて社会参加レベルでの充実を感じると同時に、支援開始から1年半を経た現状の生活に「まだやれることがあるのではないか」という人生の満足に対する欲求感をAが得たと考えられ、将来の人生で積極的に社会参加するための社会生活力の獲得のプロセスと考える。

本研究における言語聴覚士による失語症者への社会参加支援の効果として、現状の生活においてA自身が自信を持ち、自己選択、自己決定のもと社会参加することが可能となったと同時に、社会参加を通して、将来の人生におけるより主体的な社会参加とQOLの高い生活を得るための社会生活力を身につけることが示唆された。言語聴覚士が医療ソーシャルワーカーと連携し失語症者に対して、社会リハビリテーションの概念のもと社会参加支援をすることで、本研究で示された失語症者の生活における自己選択・自己決定による社会参加の拡大と将来の人生のための社会生活力の獲得にもつながると考える。

## 引用文献)

- ・特定非営利法人全国失語症友の会連合会 (2008) 『失語症の人の生活のしづらさに関する調査』。
- ・藤田郁代 (2015) 「第8章失語症の言語治療 1 言語治療の原則」藤田郁代・立石雅子編『標準言語聴覚障害学 失語症 第2版』医学書院, 204-208。
- ・奥野英子 (2007) 『社会リハビリテーションの理論と実際』誠信書房